

令和7年度 人権教育研究指定校事業における事業内容

学校名[東根市立大富中学校]

【研究の要約】

本校では、山形県教育振興計画及び東根市の教育施策に基づき、「新たな時代を主体的に生きぬく確かな学びを育む学校」を目指している。特に小中連携による「大富っ子構想」や地域と連動した「防災教育」を通じ、他者の立場に立って考える土壌を築いてきた。

本研究では、この土台をさらに発展させ、児童生徒が自分自身の幸せ（自己肯定感）のみならず、仲間や地域社会全体の幸せを願い、主体的・協働的に行動できる「人権意識の向上」を目的とした。現代社会の重要課題である「ウェルビーイング」を中核に据え、自己・他者・社会の三層にわたる多角的なアプローチを展開した。

1. 研究の実践内容:3つのウェルビーイングの創造

「他者への想像力」を「人権意識」へと発展させるため、以下3つの観点で活動を構造化した。

①個人の幸せ（自己肯定感）

Q-Uと学力のクロス分析により生徒の「居場所感」を可視化し、客観的データに基づいた個別支援を実践。心理教育や性教育を通じ、自他の尊厳を大切にする「自己受容」の態度を養った。

②仲間の幸せ（他者への共感）

ハリウリサ氏の招聘による人権教室を実施。実体験の語りから多様性を「自分事」として捉え直した。また、SNS 講演会を通じ、自律的に判断する「デジタルシティズンシップ」を育成し、人権侵害の未然防止を図った。

③地域の幸せ（社会参画）

防災訓練や社会貢献活動を「地域の幸せを創造する活動」と再定義。活動を通じ「自分の行動が地域の安心や喜びに繋がる」という自己有用感を高め、社会の一員としての自覚を深めた。

2. 研究の成果と課題

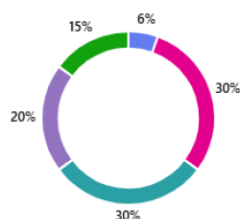
【成果】

Q-U等の客観データより、全学年で「悩みを通じ合える友人」や「自己省察」の項目が向上し、自己受容と他者理解の深まりが確認された。特に実体験に基づく人権講話は、無意識の偏見と向き合う内省的な変容を促す有効な手立てとなった。また、小中合同の学校運営協議会により、地域・家庭・学校が「育てたい子ども像」を共有し、人権教育を基盤とした強固な推進体制を構築できた。

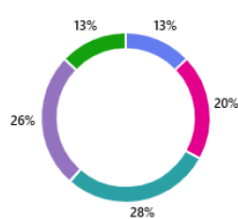
【成果例：生徒の内省力】・無意識の差別や偏見が自分にはあるかもしれない【検証・評価】

- ①. とてもよくあてはまる ②. どちらかというにあてはまる ③. どちらともいえない
④. どちらかというにあてはまらない ⑤. まったくあてはまらない

1回目



2回目



様々な事業を通して「差別しているかも」「今の自分は偏見していない」等、個々の物差しで深く考えていることがわかる。

【課題】

地域貢献や SNS 利用に関し、生徒の自己評価と保護者の認識には乖離が見られる。今後は、生徒の確かな意識変容を大人側が正しく評価・理解し、学校と家庭、地域が足並みを揃えた意

図的・系統的な教育活動を展開することが不可欠である。

【参考資料】 ウェルビーイングの視点を基にして「人権意識」を高める教育講演会
～自分らしく生きる～ 講師 タレント：ハリウリサさん



[聴講生徒の感想から]

- ・性別は身体的性別と、心の性別で決まるのは知っていたが、好きな人でも決まると分かった。自分の身近にも性的少数派の人もいるのかなあと思った。多様性は大切だと思ったし、尊重しようと思った。
- ・私は表では女みたいになっているけれど、裏（心の中）では男みたいにしていたので私と同じ感じの人が他にもいて安心しました。

[さくらんぼマラソン]



[花いっぱい運動]



【学校評価アンケート（保護者・生徒）】※主に「地域の幸せ（社会参画）」に関する項目

・私は、地域の活動やボランティア活動（クリーン活動）に積極的に参加しています。

《生徒回答》

そう思う	44%	どちらかと言えばそう思う	40%
どちらかと言えばそう思わない	11%	そう思わない	6%

・お子さんは、地域のボランティア活動に積極的に参加しています。《保護者回答》

そう思う	20%	どちらかと言えばそう思う	36%
どちらかと言えばそう思わない	28%	そう思わない	16%

【検証・評価】

地域社会の一員として歩もうとする生徒の変容を、保護者や教職員が的確に把握・評価できていないことが課題。今後は、生徒の日常的な活動を可視化し、大人の認識をアップデートする取り組みが求められる。